

第120号

三教研に望むこと
調査委員会報告
授業力養成講座
研究大会の報告
支部トピックス
学校自慢
教室の窓から
教育随想



つながること

三河教育研究会 副会長
水 藤 彰 啓



◎コミュニケーション
しなくていいの？

昨年夏休みに、娘や孫と一緒に、回転寿司に久しぶりに出かけました。驚くほどの賑わいで、案の定、順番もかなり後

の方になりそうな気配でした。順番待ちを記入するのがパソコンのタッチパネルと

なっていたことは、お客さんの多さ以上に驚きました。しばらく待っていると、

パソコン特有の機械的な声の呼び出しで、番号が呼ばれたので、

誰にも案内されることなく自分たちで席に着きました。しかし、いくら待っても

店員さんが来ません。レーンの上に顔を向けると、ここにもタッチパネルがあり、ここで注文となっていました。娘の話によれば、最近

ルのようなものとレジだけがありました。一通りそこに書いてあった説明を読むと、

すべてセルフサービスで行うことがわかり、回転寿司のとき以上に驚きました。回転寿司だけでなく、

こういうお店まで人と接することなく、言葉をお客さんでなく、効率

が優先されているのかと思いました。そういえば、駅の改札も駅員さんの姿

がほとんどなく、自動改札が当たり前のようになっていますし、

本屋さんに行かずにネットで購入できるようにもなっています。昔が懐かしいな

と思うのは、私だけでしょうか。利便性や効率性などとの引き換えに、

私たちが今まで大切にしていた人とのつながりが失われていくような気がしてならないのです。

◎ICTの活用

今年度の各部会・各種委員会の夏季研修会や研究大会も、関係教育委員会・関係機関の方々のおかげで無事に終えることができました。本

当にありがとうございました。夏季研修会や研究大会のテーマには、「言葉の力を磨き、ともに」「仲間とかかわりながら」「心豊かなコミュニケーションを：」「他者とよりよく：」

というように、次期学習指導要領を見据えており、新しい時代に必要となる資質・能力を育むために何に重点を置くかを先取りしたものばかりでした。

そこでは、速さと正確さ、効率のよさなどが最優先され、

ゆつくりと会話したり議論したりする余裕すらなくなりつつあるのではないかと

思うのです。人間的なふれ合いの経験が不足しがちな現代社会に生きている私

たちこそ、今、じっくりと子どもたちと向き合い、育

成すべき資質・能力をきちんと踏まえた上で、日々の授業改善に努めなければなりません。

例えば、インターネットで得た情報をそのままとめる調べ学習には、物足りなさを感じます。各々が調べたことをもとに議論を重ねること

で、さらに深い学びにつながるのではないかと思います。「ICT」が「主」ではなく、それを使う「人」が「主」になることを忘れてはならないのでは

ないでしょうか。このことは、今年度の学習情報委員会のICT活用研究会でも取り上げられたことでした。ICT機器を効果的に活用することで、教師が子どもたちと向かい合う時間が増えたり、授業の中で、子どもたちの意欲を高めたりしているのはすばらしいこと

◎本のよさ

です。学習情報委員会の今後の研究実践に、大いに期待したいところです。

昨年八月に稲沢市で行われた第五十三回愛知県学校図書館教育研究大会に参加させていただきました。記念講演では、「学校生活と読書」と題して、二〇一三年から三年連続で直木賞候補にノミネートされた柚木麻子さんに大変楽しいお話を

いただきました。柚木さんからは、学校図書館のあり方についての難しいお話ではなく、実際に読まれた本の感想を交

えながら、とにかく活字にふれさせること、親の読書好きが子どもを本好きにさせることなどを、生き生きと話してくれました。読書の楽しさや読書が人生を豊かにしていくということを再認識する、大変有意義な時間となりました。

私の勤務する蒲郡市では数年前より、学校図書館支援員として、NPO法人ブックパートナーさんが各学校に入り、図書室の充実に尽力していただいています。本校では支援員のKさんという方がとても熱心に、図書室の整備や生徒への読み語りなどを続けてくれています。そのKさんに、本の魅力を尋ねると、「いつでもどこでも（電源がなくても）読めること」「私にとって本は友であり、師であり、カウンセラーであり、子でもある。本の中では何者にもなれるし、未来の自分、過去の自分に会うこともできる。」また、「自分と反対の思想をもつ方とケンカすることなく対話ができる」とお答えになりました。

私たちの考える他者とは、自分の周りに実在する人間のことを指してしまいがちですが、Kさんが言われる「本の中にいる人」との出会いも、読み手の価値観を広げ、人間味あふれる人格形成につながっていくのではないかと感じました。

来年度も各部会・各種委員会の取り組みとその成果を、三教研に所属する私たち一人一人が分かち合い、さまざまな教育課題を克服していくヒントにしていきたいものです。



三教研に望むこと

次代を見据えた教育の創造

～不易を礎に
新たな教育課題に立ち向かう～

田原市立田原南部小学校

木田 剛

子どもたちが生きる未来は、少子高齢化、グローバル化、情報化等により、変化が激しく予測困難な未来だと言われています。今後十～二十年程度で現在の仕事の約半数は自動化され、子どもたちの三分の二は、大学卒業後、今は存在していない仕事に就く可能性も指摘されています。また、PISA、TIMSS等の国際調査結果の分析からは、日本の子どもは、数学的リテラシー、科学的リテラシー、読解力の三分野において、平均得点が向上している一方、学習意欲の面で課題があることが浮き彫りになってきました。さらに、日米中韓の四か国で中高生の生活と意識を比較したところ、日本の生徒は、「自分を価値ある人間だ」と認識し自尊心を持っている割合が他国の半分以上、「自らの参加により社会現象が変えられるかもしれない」という社会参画の意識が低いことも明らかにしました。こうした社会的な背景、各種調査結果等を踏まえると、次代を見据えた教育の

創造は急務です。社会変化に伴い、求められる人材像が変化する中で、どのように子どもたちを育んでいくべきなのかが問われています。

昨年八月、中教審教育課程企画特別部会が示した論点整理には、授業革新を核とする次世代型教育システムを構築するために、今後学校が為すべきことが網羅されています。子どもたちに育成すべき資質・能力を明確化した教育課程の構造化、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業、チーム学校、地域との連携・協働等のキーワードを読み解き、具体策を講じていかねばなりません。

翻って、三河教育は、昭和三十六年に発足した三教研を中心に、教育の不易と流行を見定め、時々の教育課題に正対し、三河の子どもたちをたくましく成長へと導いてまいりました。教育改革に臨む今、三教研が大切にしてきた「はじめに子どもありき」の教育理念の下、自信をもって教育を展開したいものです。子どもに寄り添って学びの本質を問い、深まりを追求する三河教育の伝統こそが礎です。

三河に三教研あり。今こそ私たちは、先輩方が築いてくださった確かな伝統を礎に、新たな教育課題に立ち向かい、全国に発信する三河教育の歩みを堂々と進めてまいりたいと考えています。

実りある情報交換の場に

安城市立安城東部小学校

加藤 雅彦

三河のある地区の小学校では、学芸会当日、演技をしていない学年は教室で授業を行うそうです。児童の登下校や授業時間数のことを考慮してのことでしょうか。また、ある地区では、地震に関わる引き渡し訓練を小中同じ日に実施しています。確かに、より実践的です。

これらのことは、本年度私が三河の教頭が集まる研修会に参加して知ることができたほんの一部分です。他の地区の先生方からいただく情報はとても新鮮で参考になります。

さて、次期学習指導要領では、学校現場にとって今までにない困難が伴うとされています。例えば、小学校高学年英語科の七十時間をどう進めるか。三河のある地区では、既に毎日十分の帯学習内容を、市で統一して実践しているようです。新しい道徳の実践も各地区で進められています。今こそ三河の各地区の実践が生かされるべきではないでしょうか。

三教研では、各種研修会や刊行物の充実に努め、着実な成果をあげています。今後、これらの活動に次期学習指導要領の具現化のための視点が盛り込まれていくと思います。情報交換が活発に行われ、スムーズな移行を支える研修会となることを期待しています。

これから私たちの道標に

みよし市立緑丘小学校

菅田 健

「二年生の時に作った本立て、まだ使ってるよ！」今年成人を迎える卒業生に出会ったときの言葉でした。当時、「学びと生活をつなぎ、体験的な学習を通して生徒の学ぶ喜びを大切にする授業づくり」を目標にしていた私にとってうれしい言葉でもありました。

新任の頃から技術・家庭科（技術分野）の教員は学校に一名で、なかなか相談する機会がありません。そんな中、いつも私が頼りにしていたのは三教研技術・家庭科部会主催の夏季研修会でした。各校の教育実践の紹介や講演、実技研修など、目からうろこの学びばかりでした。また、一人ではない喜びを感じながら学ぶこともできました。現在の研究テーマは「最適解を求め続ける生徒の育成」です。私自身、子どもが熱中でき、試行錯誤し、そして自分自身の答えを見つけ出したときに見せる最高の笑顔をめざす、子どもが夢中になれる授業づくりが新たな目標です。

私の教育実践の土台は、三河教育研究会での学びです。教材研究の楽しさや、学ぶ喜びを味わわせてくださった三河教育研究会に感謝を申し上げるとともに、今後本会が多くの先生方の道標となるよう期待しています。

『子どもの主体的な学びを支える教育』 仲間とともに、主体的に問題を解決する子の育成

調査委員会

「アクティブ・ラーニング」を重視した教育が叫ばれ、次期学習指導要領の改訂点の一つとして、「自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにする」ことが挙げられています。

私たちは、半世紀をこえて「三河の風土に根差し、子どもを中心に据えた教育を実践する」という共通理念のもと、子どもの「生きる力」を育んできました。子どもたちが自らが進んで考え、判断する力を育ていくために、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習を推し進めてきました。三河の教育にとって、次期学習指導要領の方向性は、これまで三河の教育が真摯に取り組んできたことと同様であると考えます。

これからは、子どもに向き合い、子どもの主体的な学びを支える学習を大切にして、これからの教育の在り方を示し、研究・実践に取り組んでいきたいと考えます。

昨年度より調査委員会では、主題を「『子どもの主体的な学びを支える教育』仲間とともに、主体的に問題を解決する子の育成」として掲げ、調査研究を

進めています。この度、実践事例集の編集にあたり、体験的学習、問題解決的学習等を通して、「問題意識を高める」「確かな追究を進める」「自己の学びを確かめる」という三つの追究過程における授業展開に重点を置き、三河教育の先進的な実践を幅広く集め、皆で共有し、財産としていきたいと考えました。

ここに完成した実践事例集には、三河の各支部における、小学校・中学校の魅力ある実践が掲載されています。どの支部においても、目の前の子どもや地域の実態から、子どもが生き生きと学ぶ姿を大切にして取り組まれています。それら各支部の価値ある実践を具体的な形で残すことによって、私たち教員の資質・技能のさらなる向上へと結びつけていくことができたかと考えます。

本事例集の巻頭を、愛知教育大学保健体育講座教授の森勇示先生よりご寄稿いただきました。森先生は、わが国の体育科教育の実践研究の推進役として多方面でご活躍され、三河だけでなく全国各地の学校現場において指導、助言なさっておられます。現在は愛知教育大学附属岡崎小学校の校長を務められ、大学と現場教育のよりよい連携のためにご尽力いた

だいております。森先生からは、学習指導要領が改訂される今、これからの学校教育の在り方や子どもの主体的な学びを育んでいく授業づくりにおいて、今後どのようなことを意識していくことが大切か、貴重な示唆をいただきましたので、ここに簡単に紹介させていただきます。

1 マインドに注目、方法を一旦留保

マインドに注目せず、すぐ方法論に傾いてしまうのは先生方の癖です。研究テーマが定まると、その手立て（方法論）を考えるようになります。例えばアクティブ・ラーニングは能動的学習だと聞くと、その「能動性」なるマインドには注目せず、アクティブ・ラーニングのやり方ばかり考えることになります。

マインドは理念・哲学・目的ですので、喫緊の課題意識にはなりにくいのです。基本的にはほとんどの先生方は責任感が強く真面目です。そのため喫緊の課題から手をつけなくてはなりません。中教審で発信される教育ワードは何年も議論された結果ですが、それを学校で具現化する先生に何年も考える暇はなく、すぐ明日にも授業が始まるので、形の上でスタートすることになります。

2 行動主義 vs 構成主義

行動主義では、子どもは受動的な存在です。授業が教師だけの営みなら「いかに教えるか」に注目し、その成果はテストの点数に現れます。成果を出すには教科書の内容を「目標達成評価」のサイクルで効率よく展開することになります。

す。そこでの教師の仕事は情報提供になります。

一方、構成主義では、子どもを能動的な存在とみなします。この立場では子どもに「何が学ばれているか」に注目し、その知識は「実践の中にあり」という立場を取ります。学んだ成果は子どもによる情報生産となって現れます。そのような授業の典型は、子どもによる「主題探究発表」のプロセスで展開されるでしょう。

3 発展のためにダイバシティ

子どもが友達とかかわって学ぶには、ダイバシティのマインドが必要です。教師が子どもの多様な発想を尊重するだけでなく、答が一つでない問題をどれほど考えつくかにかかっています。もちろん数学・理科に複数の真理を認めるわけにはいきませんが、解法・着想にはダイバシティが存在します。

多様な意見を交わす授業で、子どもから複数意見が出た時に先生の交通整理が必要です。先生の教材理解が足りない、交通整理はいつしか交通誘導になつてしまします。交通整理とは「類型化」のことです。

本事例集には、小学校・中学校合わせて三十二の実践が掲載されています。各学校が、今後の研究推進の一つの指針として、この事例集を積極的に活用いただくことを願っています。各支部長、ご執筆いただいた関係の皆様方に、あらためて深く感謝申し上げます。

報告

授業力養成講座

～中堅教員のミドルリーダーとしての資質向上をめざして～

授業力養成講座Ⅰ

【東三河】

期日 八月二十六日（金）

会場 ライフポートとよはし

講師 元豊田市立清水小学校校長 前田 勝洋 先生

「授業する力をきたえる」

前豊田市立足助中学校校長 藤嶋 力央 先生

「読みの力をきたえる」

【西三河】

期日 八月二十三日（火）

会場 高浜市中央公民館

講師 岡崎市立常盤南小学校校長 山本 信幸 先生

「なるほど！そうだったのか 特別活動」

安城市立桜町小学校校長 井上 幹夫 先生

「探究」「協同」を支える授業の作り方」

みよし市立中部小学校校長 山北 淳 先生

「魅力ある社会科の

授業づくりをめざして」

本年度も魅力的な講師の先生方をお招きし、講座Ⅰでは授業づくりに対する実践的な研究理論について学びました。

講師の先生からは、子どもの学びへの意欲や自覚を育てる授業づくりの知恵、子どもが主体的に学び合う教材の在り方や環境づくり、子どもがかかわり合うための教師の発問の仕方などについてご指導いただきました。また、具体的な教材を用いた授業構想づくり、授業場面での具体的な教師支援などを学ぶ場面もあり、二学期の実際の授業ですぐに役立つ

価値ある学び

を得ることが

できました。

さらに、講義

では受講者同

士で意見交換

する場がいく

つかありまし

た。活発に意

見を交わす受

講者の姿からは、受講者自身が研修の学

びを自分の言葉におきかえて、学びを深

めている様子が感じられました。



積極的に発言する受講者

授業力を高めるために

講座Ⅰでは、前田勝洋先生から学びへの意欲と自覚を育てるための知恵と技を教わりました。藤嶋力央先生からは、学習の土台となる「読み」の力をきたえる方法を学びました。どちらの先生からも、子どものやる気を引き出す手がかりを示していただきました。

講座Ⅱでは、新城小学校四年、梶村先生による社会科の授業を参観しました。子どもたちの思考の流れを大切にするために取り入れられた「自由発言」について、協議がなされました。教師が予想もしなかった意見の広がりが見られるわくわく感を味わいつつも、問題解決に向けて教師がどうかかわるべきかを考えさせられました。多くの先生方と意見を交わし、授業を見つめ直す時間はとても有意義でした。今後も学び続ける姿勢を大切に、教師として向上していきたいです。

授業力養成講座Ⅱ

【東三河】

期日 十一月九日（水）

会場 新城市立新城小学校

授業者 梶村 清徳 先生 四年 社会

ファシリテーター・アドバイザー

元豊田市立清水小学校校長 前田 勝洋 先生

期日 十一月十八日（金）

会場 新城市立立郷中学校

授業者 杉山 寛仁 先生 一年 国語

ファシリテーター・アドバイザー

前豊田市立足助中学校校長 藤嶋 力央 先生

【西三河】

期日 十一月二十八日（月）

会場 高浜市立吉浜小学校

授業者 江坂 雅史 先生 四年 総合

ファシリテーター・アドバイザー

安城市立桜町小学校校長 井上 幹夫 先生

期日 十一月三十日（水）

会場 高浜市立高浜中学校

授業者 西村 吉光 先生 一年 特別活動

ファシリテーター・アドバイザー

岡崎市立常盤南小学校校長 山本 信幸 先生

受講者 二十三名

期日 十二月六日（火）

会場 高浜市立高浜小学校

授業者 山下 裕貴 先生 六年 社会

ファシリテーター・アドバイザー

みよし市立中部小学校校長 山北 淳 先生

受講者 三十一名

講座Ⅱでは、東三河・西三河あわせて五名の先生方の授業を参観し、授業研究協議会を通して授業の在り方を研修しました。どの授業も、講座Ⅰでの講義をもとにした子ども一人一人を大切にしたい授業の工夫が図られていました。その後の協議会では、子どもの学び合いや教科の

授業力養成講座は、ミドルリーダーの育成のため、各校の中堅教員を対象に、授業の在り方や参観の仕方、協議会の進め方などを研修できる機会として、平成二十二年より開催しています。講師を招聘し講義形式で進める講座Ⅰと、実際の授業を参観し授業協議会を通して授業の在り方を学ぶ講座Ⅱを行いました。

学びの視点から、子どもの成長や教師の出の場面、授業展開の工夫などについて意見交換をしました。講師の先生方からは、教師の具体的ななはたらきかけや授業分析の仕方などのご指導いただきました。

教師とは

岡崎・六ツ美中部小 青山将太郎
「教師力とは人間力と授業力のかけ算だ。」
授業力養成講座Ⅱで私の心に響いた井上先生の言葉です。

江坂先生の教室に入ると、子どもたちが大きなあいさつで迎えてくれました。授業では、子どもたちが相槌を打ちながら友達の話聞いていたのが印象的でした。あの教室の温かい雰囲気はまさに江坂先生の人間力の高さを表すものでした。授業では、地域伝統の菊人形を守るために、自分たちはどうしたらいいのかをグループで話し合い、学級全体で意見を発表し合っていました。見通しと振り返りを大事にし、児童が意見を活発に言い合う姿がとても印象的でした。協議会では、児童それぞれが意見をもつために、これまでになかった工夫があったのかを知り、驚きました。

私は人間力がまだ未熟です。周りの先生方や子どもから、日々学ぶことを忘れず、江坂先生のような高い教師力を身に付けたいミドルリーダーになりたいと思いました。

受講された先生方が、各学校及び地区における授業力向上の推進役となり、一層活躍されることを願っています。

最後になりましたが、ご指導いただきました講師の先生方、また、授業公開していただきました新城市立新城小学校・千郷中学校、高浜市立吉浜小学校・高浜小学校・高浜中学校に心より感謝申し上げます。

部会・各種委員会

研究大会の報告

学校図書館

思いを受け取り、
伝える読書活動の推進

第五十三回愛知県学校図書館研究大会
期 日 八月十九日（金）
会 場 名古屋文理大学文化フォーラム
参加者 三百九十名
全体会
記念講演「学校生活と読書」
講 師 小説家 柚木 麻子 氏
分科会①～⑥
読書・学習・情報センターとしての
学校図書館の管理運営
（小学校・中学校・高等学校・特別支援）
ワークショップ
1 ビブリオバトルの実践
2 読み聞かせ・朗読・人形劇
3 石原宙さんを囲んで『ライトノベルの魅力』について

全体会の記念講演では、小説家として活躍されている柚木麻子氏をお迎えしました。ご自身の学生時代の読書経験では、若いときの読書が人生の支えになっていたとせつせつと語られました。また、目的や楽しみをもって本に向き合っているということ、ユーモラスに語られ、読書の楽しみ方を教わりました。読書好き

な子どもを育てるために、「本好きの大地は図書館がつくる」という自負をもつことの大切さを語られ、これからの図書館の在り方を示唆していただきました。午後は九つの分科会が行われました。分科会では、各テーマに基づいて、小・中高の先生方から提案がありました。ワークショップでは、今後の活動に役立つ技能などを学ぶことができました。



ワークショップの様子

児童が進んで読書に取り組むために

蒲郡・竹島小 鈴木 伸美

小学校部会の読書センターに参加しました。児童が進んで読書に取り組めるような環境づくり、読書の楽しさを伝える読書活動の工夫などについて、知立市、稲沢市の先生から実践報告がありました。

図書委員おすすめの本の紹介や季節、行事の本コーナーづくり、また、ブックトークや読み聞かせ、読書ビンゴなど、実践に生かせる多くのアイデアをお聞きすることができました。協議会では、ビンゴカードの工夫や選書の工夫について話し合われました。児童の足を、図書館に向けさせるための教師の働きかけの大切さを学びました。

技術・家庭（小学校家庭科）

未来を創り出す豊かな心と
確かな実践力を育む家庭科教育

平成二十八年年度
愛知県家庭科教育研究会豊川大会
期 日 十一月二日（水）
会 場 豊川市立牛久保小学校
参加者 三百九十四名
研究発表
○研究主題「学びを生かし、よりよい生活をめざして実践しようとする子の育成」
「キャリア教育の視点を取り入れた授業づくりを通して」
○豊川市現職研修委員会
小学校家庭科部会
○三河教育研究会技術・家庭部会
指導・講評
愛知教育大学教授
西尾市立中畑小学校教頭 加藤 祥子 先生
上田富喜子 先生

愛知県家庭科教育研究会豊川大会が開催され、多くの先生方にご参加いただき、とても有意義な会となりました。公開授業では、キャリア教育の視点を取り入れた授業づくりをめざし、五年生では「めしあがれ おいしさ満点マイミソ汁」、六年生では「ぼく・わたしにおまかせ 栄養たっぷり ありがとうごはん」の授業を公開しました。研究発表では、豊川市現職研修委員会

小学校家庭科部会から、キャリア教育を取り入れた授業づくりの工夫とその成果が発表されました。また、三河教育研究会の食生活班からは、「食事の大切さ」について成果や課題が発表されました。指導講師の加藤先生からは、キャリア教育の考え方について、上田先生からは、次期学習指導要領について、具体例をもとにご指導いただきました。今大会でご指導いただきました講師や来賓の先生方をはじめ、牛久保小学校並びに豊川市現職研修委員会小学校家庭科部会の先生方に、深く感謝申し上げます。



公開授業の様子

愛家研の研究にかかわって

豊川・桜町小 橋本紗和子

愛家研豊川大会に向け、キャリア教育の視点を取り入れた授業づくりを部会の皆さんと共に考え、各校の実態や特色を生かしながら実践を行い、報告し合ったり授業研究したりしたことが、大変勉強になりました。

課題解決学習のなかで子どもたちが生き生きと主体的に学び、単元を終えた後に、身につけた力が子どもたちの生活に生かされる姿を見た時、家庭科教育を充実させていく大切さを実感しました。

技術・家庭（愛技研）

よりよい生活に向けて、
最適解を求め続ける生徒の育成
「考えの広がりや深まりを大切にしたい
問題解決的な授業を通して」

第五十三回東海・北陸地区

中学校技術・家庭科研究大会
平成二十八年年度愛知県中学校

技術・家庭科研究大会

期日 十月二十八日（金）

会場 岡崎市立翔南中学校
岡崎市立安城北中学校

参加者 岡崎会場 百六十八名
安城会場 八十八名

公開授業

岡崎会場 技術分野 一年 一学級

家庭分野 二年 一学級

安城会場 家庭分野 二年 一学級

指導・助言者

岡崎会場

愛知教育大学教授 清水 秀己 先生

愛知教育大学教授 山根 真理 先生

安城会場

四天王寺大学教授 山田 綾 先生

本年度の愛知県中学校技術・家庭科研究大会は、第五十三回東海・北陸地区中学校技術・家庭科研究大会とあわせて開催されました。

岡崎会場では、技術分野のエネルギーに関する技術の領域で、岡崎市立翔南中学校、水越裕介先生が「最適な発電方法をみつめよう」の授業を公開し、家庭分野では、家族・家庭と子どもの成長の領域で、同校、刈内真紀先生が「考え合う自分・家族・地域のかかわり」の授

業を公開しました。安城会場では、身近な消費生活と環境の領域で、岡崎市立安城北中学校、越野可奈子先生が、「大豆大発見」の授業を公開しました。

子どもがそれぞれの思いや考えをいきいきと伝え合い、最適解に向けての考えを広げ、深めていく姿を参加者の方に見ていただくことができました。

協議会では、本部会の研究組織であるそれぞれの専門班（エネルギー変換班、家族・家庭班、消費・環境班）からの提案と、他県からの提案、公開授業についての熱心な協議が展開されました。そして、愛知教育大学の清水秀己先生、山根真理先生、四天王寺大学の山田綾先生からご助言をいただきました。限られた時間でしたが、有意義なものとなりました。最後にありがとうございました。岡崎市立翔南中学校、安城市立安城北中学校ならびに、同市技術・家庭部会の先生がたに深く感謝申し上げます。



公開授業の様子（安城会場）

愛知大会に参加して

岡崎・葉中 山内 由美

今後著しく変化する社会において、自らの生活に対して常に最適解を求め続ける力を育てることの必要性を強く感じました。子どもが、多様な考え方を知ったり、比較・検討したりしながら、自らの生活についての考えを深めていくことが大切であると学びました。

統計教育

生きる力を育てる統計教育

平成二十八年年度

愛知県統計教育研究協議会

研究発表会・講演会

期日 十一月二十二日（火）

会場 愛知県図書館

参加者 七十名

◎研究発表会

（提案者）

稲沢・稲沢東小 佐藤 公哉 先生

名古屋・神宮寺小 日比野浩規 先生

碧南・南中 片山 裕久 先生

◎指導講評・講演会

「次期教育課程での統計教育重点化」と今後の指導のポイントについて」

講師 愛知教育大学准教授

青山 和裕 先生

愛知県統計教育研究協議会研究発表会・講演会が、愛知県図書館で開催されました。

本年度の開催は、尾張地区が担当し、各地より七十名の参加者を得て有意義な会となりました。

研究発表会では、尾張地区から総合的な学習の実践、名古屋地区からは算数の実践、そして、三河地区からは、数学の実践を通して、自分たちの成長に目を向け、よりよい生活をしていくこうとする子どもをめざした内容が報告されました。

身近な事象をデータ化し、学習を進めていく子どもの姿が伝わってくる発表でした。こうした実践は、世の中にある様々な情報から必要な情報を選び、活用する子どもの姿をめざしたものです。統計教育を通して、生きる力を高めるために、学習内容をいかに具体化していくかといった提案となりました。

続いて、愛知教育大学の青山和裕先生にご講演をいただきました。青山先生からは、今後の教育課程と統計のかかわりや海外の統計教育の現状に加え、算数・数学科における統計指導のポイントとして、実社会とのかかわりを意識した問題解決活動を重視していくことが重要であることについてお話しいただきました。



講演をされる青山先生

研究発表会・講演会に参加して

碧南・日進小 山田 晃広

情報化やグローバル化など急激な社会的変化の中で、自分なりに試行錯誤しながら新たな価値を見出し、必要な資質・能力を養っていくために、今後の学校教育の中での統計教育の重要性を感じました。実践紹介の中で、集計結果をただ読み取るだけでなく、自分の想像・発想とのずれをもとに、他の質問内容の集計結果に目を向けさせて、新たな発想を生み出していく授業展開から、統計教育の広がりの可能性を強く感じました。

生徒指導

豊かな心と社会性を育む
生徒指導をめざして

平成二十八年年度

愛知県生徒指導研究大会

期 日 十一月二十二日（火）

会 場 豊田市民文化会館

参加者 七百八十六名

研究発表

○自己有用感を味わいながら、最高学年への自覚を高められる子ども
の育成

○一人一人の生徒に「生き抜く力」
を身につけさせる生徒指導

○専門高校における豊かな心の育成
をめざして

指導高評

愛知県教育委員会

義務教育課 主席指導主事

西村 剛志先生

本年度は、愛知県生徒指導研究大会を三河地区が担当し、豊田市民文化会館で開催しました。三河地域、特に豊田地区の先生方が運営の中心となりました。

研究発表では、三河・尾張・高校で、それぞれ一名の先生が発表されました。

三河ブロックからは、豊田市立小清水小学校の豊田家康先生が、子ども同士の認め合い活動や様々な活動や行事後の振り返り活動を手立てに、子どもの育成を

図った実践を発表されまし
た。抽出
児が変容
していく
姿がとて
もよくわ
かる内容
で、参加
者からも
好評でした。



研究協議で質問に答える豊田先生

また、高浜市立翼小の深津諭先生が、居心地のよい学級・学校づくりの取組について、豊川市立南部中学校の宮本貴之先生が、関係諸機関と連携をし、積極的な生徒指導を行ったことについて、誌上発表として大会に原稿を寄せられました。

研究大会に参加して

豊橋・二川中 山下 洋平

本研究大会は、小・中・高と校種の異なる生徒指導の発表を聴くことができ、貴重な機会です。今年度のそれぞれの学校の研究発表に共通する点は、「自己肯定感、自己有用感」であったと思います。日々の活動の中で、教師が生徒を褒める場面やアサーショントレーニングを継続的に行うなど、すぐにも取り入れたくなるような実践が紹介され、大変参考になりました。

研究大会で学んだことを、今後の教育活動に生かしていきたいと思っています。

へき地教育

ふるさとで心豊かに学び、
新しい時代を切り拓く子どもの育成

平成二十八年年度

第五十四回愛知県へき地教育研究大会

【東栄町立東栄中学校会場】

期 日 十月二十五日（火）

参加者 百八十八名

主 題 自ら学び、心豊かにたくましく生きる生徒の育成―互いを認め、共に高め合う東中生―

内 容 アトラクション・ポスターセッション・研究発表・公開授業

（三学級）・研究協議

【新城市立黄柳川小学校会場】

期 日 十一月二日（水）

参加者 八十二名

主 題 体・徳・知のバランスのよい子の育成―学力を伸ばす黄柳川スタイルの創造―

内 容 アトラクション・研究発表・公開授業（六学級）・研究協議

第七次研究推進
五か年計画の三年
次、第一期研究の
まとめの年にあた
ります。

学校・学級経営
の深化・充実の領
域で東栄中学校



共に高め合う授業

が、学習指導の深化・充実の領域で黄柳川小学校が、研究発表を行いました。東栄中学校では、授業、仲間、健康づくりの面からの取組の発表が、黄柳川小学校では学力を伸ばす取組の発表がありました。どちらの学校も、授業の中、子どもたちの生き生きとした姿や成長した姿を見ることができました。研究協議も活発になされ、研究を一層深めることができました。

研究は第二期一年目へと続きます。



自分の思いを述べる子ども

東栄中学校の授業を参観して

北設・清嶺小 近藤 和義

二年生の英語の授業を参観しました。間近に迫った海外研修に向けて、まさに生きた英語を、効率よく学んでいました。四人の先生方のチームワークと、周到な準備、そして、生徒への投げかけの巧みさに感激しました。生徒も授業者も参観者も楽しめる授業でした。

小規模校の強みを生かして

豊田・滝脇小 中武 勇一

学習規律、教師の姿勢や手だての統一。そこには、生き生きと活動しながらもしっかりと鍛えられている子どもたちの姿がありました。全教員がぶれることなく、同じ方向を指して指導する「黄柳川スタイル」は、小規模校の強みを生かした素晴らしい実践でした。

岡崎支部

岡崎小中学校連合音楽会

第四十四回「岡崎のハーモニー」の開催

岡崎市立全小・中学校

十一月十九日(土)、新しく生まれ変わった岡崎市民会館あおいホールにて、「岡崎のハーモニー」を開催しました。

この音楽会は、市内すべての小中学校から子どもたちが集い、音楽交流を深め、感動体験を通して、豊かな人間性を育む行事として、昭和四十八年から毎年続いています。今年は文化庁主催「第三十一回国民文化祭・あいち二〇一六」の事業としても参加しました。

岡崎市制百周年の特別な年、テーマを「岡崎一〇〇年音ヒストリー」とし、音楽で岡崎の百年の歴史をたどりました。

市内六十八校を四つのブロックに分け、



「岡崎のハーモニー」感動的なエンディング

その時代の特徴を表すステージを構成しました。

各ブロック(小中合同の合唱ステージ)

テーマ

・A「歩いてきたこの道」

・B「なつかしい昭和の歌」

・C「岡崎のハーモニーを彩る名曲」

・D「未来への行き先」

百年前にタイムスリップした山田耕筈の世界。「リングの唄」での昭和を彷彿させる踊りの演出。映像と共に振り返りながらの「おかげさの心の歌 夢ふくらませ」。中学生による『この道』の独唱や『夢の世界』の重唱。各ブロックが一つの流れを創り、岡崎の百年の歴史を音楽で豊かに表現しました。

さらに、女声合唱や吹奏楽、弦楽合奏、オーケストラによるレベルの高い充実した演奏が感動をより大きなものにした。エンディングの『おかげさの心の歌 夢受け継いで』『さようなら』の全員合唱は、多くの聴衆の涙を誘いました。

感動体験は人の心を豊かにします。自ら感動し、その心を音楽でメッセージとして伝えていくのがこの音楽会です。今後も人と人をつなぎ、時を越えて、未来を担う岡崎の子どもたちを育み続けていきます。(文責・上地小・細井鶴貴)

支部 トピックス

新城支部

三学重視の授業づくり・

学校づくりへの取り組み

岡崎市立全小・中学校

新城市では、平成二十五年度から平成三十年間までの六年間にわたり、全小中学校に研究委嘱を行って

います。この研究は、「体徳知の三学」のあり方を探りながら、未来を築く人材の素地を培い、社会を生き抜く底力を育てる場としての授業づくりと学校づくりを推進することを目的としています。委嘱期間は二年間で、二年目に研究発表会を行います。豊川市と同日に研究発表会を開催し、教員が相互参観しています。公開授業後には、研究討議等も行われます。

今年度発表した四校には、次の特色がありました。

①先進的な内容に取り組む

新城小学校では、アクティブ・ラーニングにつながる問題解決的な学習を取り入れ、子どもが学びの面白さを実感する授業を実践しました。

東郷東小学校では、ユニバーサルデザインを考えに基づいた「どの子もわかる国語の授業」に取り組みました。多くの

子どもたちが内容を理解することができました。

②地域と連携した「共育」に取り組む

庭野小学校では、地域素材を教材化し、地域の人々と共に学んだり活動したりすること、子どもの学びをより深めました。

③生徒が主体的に体力向上に取り組む

鳳来中学校では、生徒が自ら生活習慣を見直し、体力向上に取り組む活動を行いました。そこで、生徒の力の足りなさを補完するための「鳳中体操」を創作し、全校で取り組みました。

研究を行ったり研究発表会へ参加したりすることを通して、教員の指導技術が高まり、学校力向上にもつながっています。また、家庭・地域との連携も図られ、「共育」の輪がさらに広がっています。

(文責・東郷東小・星野真久)



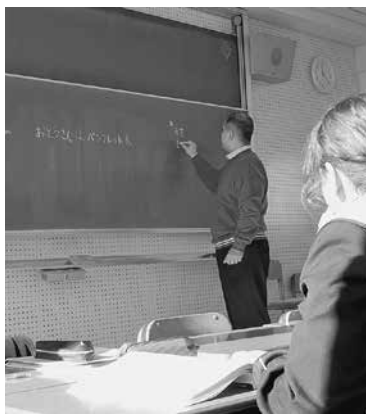
「授業を語る会」での研究討議

将来を見据え、個のニーズに 応じた日本語指導の模索

知立市立知立南中学校

本校校区には、外国籍児童が全校の約六割を占める知立東小学校があるため、毎年多くの外国籍生徒が入学してきます。平成二十八年度は、三学年で八十名の外国籍生徒が在籍し、学校全体の約十三％を占めています。よって、日本語指導の充実と発展が毎年の課題となっています。

現在の指導体制は、日本語指導コーディネーター一名と各学年日本語チューター三名を中心に、その他二十七名の教員、日本語指導助手一名の総勢三十二名で個別指導、グループ指導、入り込み観察を行っています。指導の中心は個別グループで、そのレベルをDLA・Dialogic Language Assessment（外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント〈文部科学省〉）を参考に一・三の三



日本語指導助手による初期指導

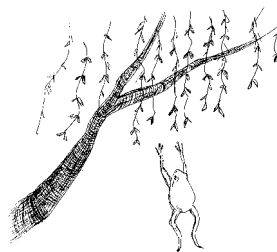
段階に分けて、きめ細かな指導・支援に心がけています。また、外国籍生徒の過去の進路希望の状況も考え、本年度は、個の実情に応じて国語・社会に加えて数学も行うこととしました。

昨年度までの本校は、日本語指導コーディネーターが、学級担任を兼ねていたため、日本語指導全体を見通すには時間に余裕がなく、コーディネーターの負担がかなり大きくなってしまっていました。そこで、本年度は、日本語指導コーディネーターが学級担任を持たず、日本語指導により多くの時間を費やすことができるようにしました。そうしたことにより、教材の開発や週一回程度開かれる日本語部会の充実が図られるようになりました。特に教材開発では、どの教科の教員が支援に入っても同じ教育効果が得られるよう工夫をし、「読む、書く、話す、聞く」に配慮した支援を心がけています。また、保護者との勉強会を開き、学校と家庭が足並みをそろえながら子どもたちを支えていく取り組みを増やしています。

今後も教材開発や保護者との連携を進め、いつでも誰でも日本語指導ができる体制作りを進めていきたいと考えています。

（文責・永坂 美香）

学 校 自 慢



地域とかかわり、 地域に育つ子どもたち

刈谷市立富士松東小学校

「気持ちいい風ときれいな景色の小径」「にぎやか通りを楽しむ小径」「ほっとひと息池めぐりの小径」。これらは、本校の三年生が学区を探索し、学習のまとめとしてお勤めの小径につけたキャッチフレーズです。

本校は、商業、農業、工業のいずれも盛んな地区に位置しています。商業では、子どもたちはショッピングセンターと古くからある商店を見学し、それぞれの良さを見つけました。農業では、農家の方から特産の大根や切り干し大根の作り方を教えてもらいました。工業では、トヨタ車で車の組み立てラインを目の当たりにしました。地域の方の協力のおかげで、子どもたちの活動や学びがとて豊かになっています。

また、トヨタ車体が、学校に隣接する「ふれ愛パーク」を三年前に整備しました。その際、公園を学校教育に役立ててほしいと、散策路や芝生広場だけでなく、田、畑、果樹園やビオトープ、雑木林を

作ってくださいました。近くの愛知教育大学と連携し、地域の植物相や昆虫類・魚類の動物相を調査して、自然の状況に近い環境が整えられました。オープン当初の植樹会には、トヨタ車体の方、地域の子どもたちやその家族など総勢二百名が参加し、植樹を行いました。

この「ふれ愛パーク」で、四年生は、四月に田植えを体験し、九月には稲刈りをします。十二月には、作った稲を使って餅つきやしめ縄作りを行います。二年生は、七月にビオトープでドジョウやメダカ、アマガエルを捕まえました。そこでの出前授業で、「ドジョウのひげは十本だよ」と教えてもらいました。

このように、地域の方とのかかわりを通して、地域に愛着と誇りをもつ子どもを育てています。（文責・加藤 佳子）



「ふれ愛パーク」で生き物探し

教室の窓から

郷土を愛し、地域のために

活動できる児童の育成

「三年生「農作物を育てよう」」

碧南市立大浜小学校

杉浦 浩一

本校は碧南市の南部に位置し、漁業・農業が盛んな地域にあります。中でも、にんじんの作付けが盛んで、生産量は県下一番を誇るほどです。地域の特産物を通して、郷土を愛し、地域のために、すすんで活動できる子どもの育成をめざし、毎年三年生では、地域の方々の協力を得て、農作物を育てています。

一学期はとうもろこしの栽培をしました。学校の近くにある「あおいパーク」楽しみながら農業と触れ合える体験型交流施設」の職員さんを講師に招き、土作り、種蒔き、とうもろこしの育て方を学びました。子どもたちは、日増しに大きく育っていくとうもろこしに驚きながらも、水やりや間引きに熱心に取り組みました。「あおいパーク」の職員の方も、こまめに観察に来てくださり、子どもたちがその姿を見て、感謝の気持ちをもつと同時に、自分たちもしっかり世話をしないとけないという気持ちを強くしました。七月には立派に育ったとうもろこしを収穫することができました。

二学期にはにんじんの栽培をしました。JAあいち中央の職員さんと近くの農家

の方の協力を得て行いました。今回は栽培するだけでなく、碧南市のブランド野菜である「へきなん美人」を広めるために自分たちができることを話し合いました。「にんじんが苦手な人でも、へきなん美人なら食べてみたい!」と思えるポスター作りに挑戦しました。そして、一月に開催された「にんじんサミットin碧南」の会場に、子どもたちの描いたポスターが掲示されました。

三学期には市主催の「地産地消推進事業」である地元農作物を使った体験教室を開き、にんじんジュース、にんじんゼリー、にんじんサラダを地域の方といっしょに作り、会食します。このような活動をを通して、子どもたちは郷土に対して愛着を深めることができると確信します。今後も保護者、地域の先生と協力しながら、地域のよさを生かした実践を推進していきたいと思っています。



機械を使った土作りに興味津々

私のコレクション

白いお皿

豊川市立一宮西部小学校 柴田 斉子

子年生まれのせい、小さい頃からのものを集めるのが好きだった。「景品」「期間限定」とか「もれなく」という言葉にも弱い。こうした習性が遺憾なく発揮されるのが某パン会社による「春のパン祭り」である。期間中、パン袋に貼られたシールを二十四点分集めると、お店で「白いお皿」と交換してくれる。これ

はもう、集めずにはいられない。

「白いお皿」は、毎年そのデザインが変わる。ふちがフリルのようになっているものも多いが、この十年間はいったってシンプルだ。長野オリンピックが開催された九十七年のお皿は、「スノーレッツ」が印刷されていて一目でわかる。「フアントジャボール」(九十四年)は気に入って五個集めた。全体的に簡素でありながら洗練されたフォルムは飽きがこない。表面は年を経てもお肌のようにくすむことなく、つややかだ。強化ガラスでできているため、丈夫で使い勝手もすこぶるよい。さすが、フランス製だけのことはある。まさに究極のお皿と言えよう。

祭りの三か月は長いようで短い。「白いお皿」を得るためには、計画性に加え、

絶対に手にするのだ、という強い意志が必要となる。菓子パンについているシールは〇・五点なので一枚を手に入れるためには四十八個もの菓子パンを食べなくてはならない。甘いものが好きな私でも難儀である。食パンのなかには三点のシールがついているものがある。能率的で、コストパフォーマンスもよいが、四十八枚を食べるには、土日の三食をパンにしてなお三週間を要する。だからこそ、台紙が埋まったときの達成感、お皿と引き換える時のわくわく感はたまらない。苦勞を忘れる瞬間だ。ようやく手にした一枚は、同志のようにも思われる。

手元には三十枚を超える「白いお皿」がある。残念ながら全三十六種はそろってない。気力衰退、食欲不振、台紙紛失等、いろいろな事情や不測の事態が年度末のこの時期には発生する。そうしたことも今となっては懐かしい。

春、到来。「春のパン祭り」開催中!



思い出深い白いお皿

教育随想 (80)

トダダ ダー ン ダダダ ダー ンと
書けば、多くの皆さんは、ベートーベン
の『運命』の出だしを想起されるので
はないでしょうか。音を使って、メロ

ディー、ハーモニー、リズムな
どで曲のイメージを伝えるのが
音楽の素晴らしさだと思います。
しかし、忘れてはならないのが、
音のない時（休符）だと思っ
ます。音楽は音を伝えているだ
けでなく、音のない時も伝えて
います。

ところで、『運命』の最初の『ダ』
は指揮棒が下りたときに演奏す
るのか、上がったときに演奏す
るのかをご存じでしょうか。指
揮者になったつもりで指揮棒を
振ってみて下さい。正解は指揮
棒が上がった時に最初の音がで
るのです。つまりベートーベン

は、曲の最初に半拍の休符（運命の場合
は八分休符）を置いたのです。この休符
があるのとないのでは、曲の感じは大
きく違ってきます。

授業も同じではないでしょうか。教師
や子どもたちが話せばなしの授業に味
わいがあるのだろうかと思うのです。じつ
と考える時間（休符）こそ大切にしく

てはいけないし、それは、作曲家が意図
して休符を入れるように、意図して設定
する必要があると思うのです。さらに、
教師はその授業の途中で、子どもたちの
様子を見ながら、休符を設定しなくては
いけません。そういう難しいアドリブも
要求されるのですが、アドリブの楽しみ
もあります。

休符を味わう



幸田町教育委員会 教育長
小野 伸之

めているとは思いますが、自分を中心
にした教育に重きを置きすぎる危険があ
るのではないかと思います。

奈良学園大学の梶田勲一学長は、自分
のことだけに関心を持ち、自分のことだ
けを話したが、自分という存在に他の
人も関心を持つてくれるのが当然と考え、
自分のことで他の人たちも喜んでほしい、
という無邪気さに溢れた、自

己中心性を「自己愛的全能
感」と呼び警鐘を鳴らしてお
られます。「自己有能感」など、
どの言葉を使うかは本当は大
きな問題ではないとは思いま
す。相手や周りの声に耳を傾
けて静かに聞いたり、周りの
人の気持ちに思いを馳せる時
間（休符）を置いたりするこ
とをこれまで以上に大切にし
ていく必要があると思ってい
ます。

♪ちよつと待つて プレイ
バック プレイバック 今の
言葉 プレイバック プレイ
バック 山口百恵さんが歌った歌の一節
です。この後、歌も伴奏も全てが止まる
一瞬があります。歌詞の内容に合った一
瞬の静寂です。この一瞬の静寂がこの曲
に大きな味わいを与えていると私は思
います。音を発するのと同じように、音を
発しないことも意味があると感じさせて
くれる曲だと思います。

◆平成28年度各部会・委員会刊行研究集録
国語 研究集録 第30集

「自らの言葉の力を磨き、とも
に高め合う授業」

算数数学 研究紀要 平成28年度 第36号

造形 子どもの思いが広がる造形教育

養護教諭 保健指導実践資料集

総合的な学習 平成28年度「総合的な学習」実践
事例集

生徒指導 「自ら探求し、共に学び合う総
合的な学習の授業」

生徒指導 生徒指導

編集後記

ここに平成二十八年度の最終号（第
百二十号）をお届けいたします。

学習指導要領の改訂をはじめとする
新たな教育への対応が求められる中、
三河教育研究会の果たすべき役割と期
待は、ますます大きくなるものと確信
します。子どもたちの確かな成長を願
い、これからも先生方の教育活動に資
する会報誌となるよう一層取り組んで
まいります。

この一年間、貴重な原稿をお寄せい
ただきました皆様に、心よりお礼申し
上げます。また、「教育 みかわ」を
ご愛読くださり、ありがとうございます。

表紙の写真

「和太鼓クラブ」
撮影 豊橋市立高師小学校

半田 益海 先生

カット

愛知教育大学附属特別支援学校
神谷 宜欣 先生